



TITLE:

十八世紀南インドにおけるバラモンの土地權益

AUTHOR(S):

重松, 伸司

CITATION:

重松, 伸司. 十八世紀南インドにおけるバラモンの土地權益. 東洋史研究
1972, 31(2): 155-181

ISSUE DATE:

1972-09-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/152862>

RIGHT:

東洋史研究

第三十一卷 第二號 昭和四十七年九月 發行

十八世紀南インドにおけるバラモンの土地權益

重 松 伸 司

目 次

本稿の課題

一 バラモンの土地權益

二 不課税地と課税地

三 ムスリム治下の土地權益

小結と今後の課題

本稿の課題

インド社會においては、土地をめぐる權益關係が、單に階層關係のみで規定されるのではなく、カーストによる身分・職能關係によつても規定されてきた。^①この點が、ヨーロッパや日本や中國の諸社會と大きく相違するインド社會の特性である。そのような特性が、しばしばインドの社會構造を複雑にし、その理解を困難にした。南インドに導入されたライーヤ

トワリー制度にもその傾向が顯著に認められる。

周知の如く、ライヤトワリー制度とは、イギリス東インド會社による徵稅制度であり、その内容は「小土地所有者による個別經營」であり、その生産主體である「農民」とは「小土地所有者」實質的耕作者「地租負擔者」を理念とするものであった^②。そして、そのような理念型態に相應する「農民」層を主として「在來」のミラースダールに見出そうとした。しかし乍ら、このミラースダール層が果して當時の會社政府の描いた「農民」像に合致したものであったか否かは疑問であつた。事實本稿で對象とする「バーラマハールレコード」や「第五報告書」をはじめ、土地所有「徵稅制度に關する多數の Settlement Report や特別報告書が作成され、「土地所有者、地租負擔者」の規定、「徵稅制度の改革」が試みられたにもかかわらず、明確な解答は得られなかつたのである。その理由はミラースダール層が南インドにおいて必らずしも一律に定義さるべき「階層」ではなく、ダルマ・クマール教授が指摘している如く、地域によつて多様な概念を有しているのであつた。すなわち、所有領の大小という側面からみれば、それはザミンダールに匹敵する大地主から單なる小保有農民に迄わたる概念であつた。また、カーストにもとづく土地に對する權益關係からみれば、ミラースダールはバラモン及び非バラモン諸カースト（及びそのセクト）の多様な「農民」層を包攝するものであつた^③。従つて南インドの土地制度の解明に當つては、常にカースト的權益關係とカースト内階層關係の兩側面から追求される必要があつた。

ところで、これ迄南インドの土地所有關係はカースト集團による村落形態の研究から斷片的にうかがうことができた。すなわち、T・V・マハリンガム、ニールカント・シャーストリ、A・アッパドライ等の諸先學による「中世」南インド史研究である。これらはいずれも土地制度の體系的論考でなく、且つ不分明の部分も多くあつた。近年、これら諸研究を批判しつつ、新たに、ブラフマデーヤ村落（バラモンを主要成員とする村落）及び非ブラフマデーヤ村落（シュードラ等非バラモンカースト集團を主要成員とする村落）とを對比し、各々の村落様態、カースト集會の機能、土地所有權、支配權力（國家）との關係等を具體的、實證的に分析する研究が進められつつある。しかし、これらの研究は史料上の制約もあつて、主に「

中世」南インドの寄進地を對象とするものであり、中世社會において、地方社會の統合に樞要な役割を果たしたブラフマデーヤ村落の研究に主眼があつた。ヴィジャヤナガル朝期よりムスリム、諸地方王家の支配を経てイギリス支配に繼起される時代の社會經濟に關してはほとんど明らかにされていない^⑥。そこで、本稿では右にのべた研究狀況をふまえた上で、次の課題を考察してみたい。

(1) これ迄斷片的にのべられてきたバラモンの土地をめぐる權益内容を、所有の對象、所有の形態、課税地と不課税地の相違から明らかにする。

(2) ハイダル・アリ、ティプ・スルタンのムスリム支配下で、バラモンの既得權益が如何なる制約を受けたかを、土地權益の變化から明らかにする。

〈時代・地域〉

對象とする時代・地域は、主に十八世紀中葉と末期のマドラス管區中部、バーラマハール地方である。この時代を概観すれば、一方では、英・佛間の植民地爭奪が南インドの全面領有をめぐる激化しており、他方では、ハイデラバード、マラータ連合、地方諸王家が植民地支配勢力の抗爭を利用しつつ、離合集散をくり返していた。やがて、十八世紀半ばより、マイソールを中心に急速に勢力を擴大してきたハイダル・アリ、ティプ・スルタンのムスリム父子は、セーリングパタムを據點に、北は南カーナラ、南はマドゥライに及ぶ地域を支配下に治めた。ムスリム勢力の伸張は、同じくヨーロッパ勢力を驅逐して支配の貫徹を圖っていたイギリス東インド會社政府と眞向から衝突した。三次（もしくは四次）にわたるアングロ・マイソール戰爭は、會社政府のマドラス管區の全面領有を決定づけた最後の戰爭であり、且つ南インドの土着勢力の最後の大規模な抵抗であつた。

バーラマハール地方は、イギリス支配期にはしばしば「バーラマハール及びセーラム」と呼ばれていたが、明確な徴税・行政區域ではなく、すでに、イギリス支配前からバーラマハール地方と通稱されていた。この地方は現在のマイソール

州中部以南タミルナードゥ州セーラム縣の大部分を領域とする。一七九二年セーリンガバタム條約によりティプー・スルタンから會社政府に割讓されてより、この地は、北部地區、中部地區及び南部地區に分かれた。會社政府は各地區毎に督^{サダヤ}府を設置し、その地の徵稅・軍事務を管掌させた。一七九二年以降九九年に至る迄、アレクサンダー・リードを中心とするトーマス・マンロー、ウィリアム・マクラウドらの徵稅官（兼行政官）は、舊來の土地制度を調査し、その結果、ライヤトワリー制度の原型ともいえる「個別土地所有に個別地租負擔」の土地に徵稅制度を試行したのであった。かくして、バーラマハール地方は、ハイダル、ティプー二代のムスリム支配の影響を強くうけた地であるのみならず、南インドの主要徵稅制度たるライヤトワリー制度の、いわば搖籃の地でもあった。

ところで、本稿でムスリム支配期の南インド社會をとりあげる意圖についても少しのべてみたい。イギリスの當時の諸報告及びそれにもとづく諸研究によれば、ムスリム支配の南インド社會への結果として「重稅と農民からの收奪強化→農民の逃亡による土地の荒廢→社會秩序の全き混亂及び經濟的衰退」を指摘する。しかし、この時期のイスラム支配の具體的様相及びヒンドゥー諸王朝による支配との比較研究のなされていない今、右の指摘をそのまま肯定し難い。バートン・スタイン教授は、南インドの社會經濟構造の歴史的變遷について一つの假説を提示している。それによれば、パッラバ朝よりイギリス支配に至る「中世」から「近代」にかけての南インド社會は、(1)パッラバ・チョーラ朝（九～十三世紀）(2)ヴィジャヤナガル朝（十四～十七世紀）(3)イギリス支配初期（十八世紀～十九世紀初頭）に分期される。各期の社會狀況として、第一期はブラフマデーヤ村落及びサト・スードラの非バラモン集團によるベリヤナードゥを核とする地方社會の統合、第二期は騎士領主層に對する封土を中心とする地方社會の統合、第三期は會社政府による「徵稅地域」を中心とする統合をあげている。そして、第二期においては、ムスリム支配は基本的には南インド社會に變革をもたらさなかつたとを示唆しているのである。本稿では、土地を媒介とするムスリム支配權力とバラモン權益との關係を検討することによって、右の假説に對する檢證を試みるものである。

〈史料〉

本稿で扱う史料は「セーラム縣ギャゼッテイア」二卷（以下SDGと略記）「バーラマハールレコード」全十三卷のうち、主として「第五部財産」^②である（以下BRと略記）。後者の史料集は、一七九二年から一七九九年にかけて、アレクサンダー・リードのバーラマハール在任中、その地の歴史、住民構成、土地制度、徴税様式、通貨制度、導入すべき徴税形態等、に關する徴税官らの英文書簡・覺書・報告書、インド人の詔勅・請願狀の譯文等を收録したものである。本史料を検討するにあたっては、對象がマドラス管區の一部に限られており、またタミル語、ペルシア語の英語への轉寫、用語概念のヨーロッパ的概念への轉化、徴税官の社會狀況の不精通による誤り等がみられるので、必要な限り、用語の譯註をつける。^③

一 バラモンの土地權益

バラモンに與えられたイナムは一般にアグラハールム、ブラフマデーヤとよばれる。これらは王侯・富者によってバラモンに施與・寄進・賜與された土地（村落及び村落の一部）及び商人によってバラモンに賣却された土地とそれらの權益である。これらの語は諸史料に散見するが、その權益内容について實證的に明らかにした研究はみられない。^④本章では、まず、バラモンの特權的權益といわれる内容を、二つの詔勅から明らかにしてみたい。

「一」マイソール藩王チンタム・レディがゴーパール・バット、アナンタ・バット及び他のバラモン達に與えた詔勅^⑤

アグラハールムのアーナイヤームパッティについて。サーリバーハナの御世（二五六五年）サルバダーリの一四八七年、チンタム・レディはゴーパール・バット及びアナンタ・バット及び他のバラモンに對してタカーヴィの詔勅を與えた。

彼の繁榮がとこしえであるように。この世の主、ハリハララーヤルを懲する者、諸語を知る者達、三人のラージャーを打ち破る者、諸王國を支配する者、諸王國の奴隸支配者、ムスルマンを略奪する者……（中略）

チンタム・レディの孫、マラ・レディの息子チンタム・レディはスリーランガラーヤルの命により、西はガンガヴァツリ、北はナツラヴァルル、東はティダーヴール、南はスンダカルを境界とするヴァカダム・チョウニ郡のシバカーミヤムマサムドラムとよばれる村の分割地を、ゴパール・バット、アナンタ・バット及びパンディット達に與えた。

上述の村落の境界内の產物、即ちこの村落で收穫されるものすべて、埋藏物、即ち村に存するすべてのもの、水、村に存在するすべてのもの——樹木・果樹（タル）、貴石類、將來得られるであろう權利（アクシニアガミ）シッディ及び將來所有される物件（サードウヤ）——貯水池、溜池、園宅地等々がすべて完全に所有され、且つ、その所有者によつて賣却され、抵當に入れられ、交換され、贈與されるように。かくされんが爲に、この村は六十四の均等な「分割地」に分けるよう決定し、且つ與えるものである。その「分割地」のうち一區はラクシュミ・ナーラヤナスワミ寺院に、残り六十三區はバラモンに施與するものである。

〔二〕シャルワン・マートウ・ナーイクがゴーピヌダー・アルチット及び他のバラモンに與えた詔勅^②

マートウ・ナーイクの御世A・S一四五〇年、ヴィローディクリットの年（西曆一五二八年）チッテイライの第十三日、ゴーピナード・アルチット及び他のバラモン達に次の詔勅を記し、與えた。

地上の主、すべてのラージャ達の王、諸王國に境界を設ける者……（中略）我がコロマンデルの王國の、アトウールの郡に、今、マハーデーヴァサムドラムと稱するオディヤットールの村がある。この村の西にはサーターパディ、北にはナドゥバルル、東にはマンガリベヘル・マリアダム、南にはティルバーの境界が存在する。その村の境界石内の、

灌漑地、非灌漑地、貯水池、水路、荒廢地、……等は、寺院領（デーバダーヤム）として、また、バラモン所領（ブラマダーヤム）として、二十四と四分の一の「分割地」に分ち、二家族毎に一分割地を享受せしめよ。また、同時に、産物、即ち、この村で收穫されるものすべて、埋藏物、即ち、（村に）埋められているものすべて、水、即ち、村の中のすべての水、樹木、即ち、村の中のすべての樹木、貴石、アクシニアガミ、即ち、布告を與える時期の國家の穀物の取り分、シッディ、即ち、現在收穫しうる作物、サードゥヤ、即ち、將來土地から産する作物、が與えられよ。汝が子孫達が太陽の續く限りすべての所有物を所有し續けることができるように。……

〔一〕、〔二〕の史料では、村落の規模（面積、居住人口、カースト構成、村落様態）は不明であるが、少なくとも施與された時の村落の境界はかなり明確に區分されており、境界毎に標石が置かれていたようである。しかも、村落は、王の命令によつて、幾區劃かの均等な「分割地」に區分され、分割地數に應じて數家族のバラモンに施與されたのであつた。即ち、一村が必らずしも特定の一バラモンに施與されたものではなかつたし、しかも、この分割地は、次章でのべるように、一定・不變のものではなく、王朝・支配者の交替によつて、一村の分割地數がかえられることがあつた。

次に、施與地に付隨する權益の具體的内容であるが、それらは主に（i）村落内の灌漑地及び非灌漑地（ii）果樹・穀物を含む作物（iii）貯水池・水路による水の用益（iv）國家の地代（v）村落内の埋藏物であつた。これらの所有地とそれに付隨する諸權益の代々世襲・賣買・交換・讓渡が認められていた。

ところで、バラモンの享受する土地は、宗教上のタブーによりバラモン自身の手で耕作されることはなかつたから、當然耕作に従事する農民層（カースト）がバラモンの下に存在したと考えられる。BRには、この農民層については全く記述がみられない。果して、施與村落に付隨して、村落内カースト集團も施與・讓渡の對象となつたのであろうか。まず第一に、施與村落にヴェラなどの、バラモンに比肩しうる獨自の經濟的社會的勢力を有するカースト集團が居住している

場合である。このような村落形態に關して今迄のところ史料・研究ともに不足しており、明確なことはいえない。第二に、荒廢地もしくはヴェララ以外のカースト集團の居住する村落の施與の場合である。この場合はバラモンに身分的に從屬するバライヤ（バライヤン、パッリ、パッラン）らのアウトカースト層が農奴もしくは奴隸的存在として施與村落の耕作に當つたことは考えられる。また、そのようなカースト層の存在しない場合、他處より農業労働者（カースト）を雇傭することもあるようである。もつともダルマ・クマール教授の所論では、元來身分的社會的に固定された低カーストのみを農奴、奴隸、もしくは農業労働者層と規定しているが、イギリス支配前の歴史過程で、アウトカースト外のカースト成員が階層化の結果、バラモンに經濟的に從屬したこともあつたのではなからうか。

二 不課税地と課税地

次に、村落・分割地の施與條件、所有形態からバラモンの土地に對する權益を明らかにしてみよう。

B R中のアレクサンダー・リードの書簡によれば、バラモンの村落所有形態には (i) エカボーガム (ii) アグラハラム (iii) シュロットクリヤムの三つがあつた。(i)の形態は完全に單獨の所有村落であり、且つ、國家に對する一切の税を免除されている自由所有村落であつた。(ii)の形態は、(i)と同様、國家への一切の税を免除されているが、複数の所有者による共同所有であつた。そして、(iii)の形態は一人もしくは複数の人々によつて所有され、且つ、地代もしくは免役地代を國家に貢納する義務のある「コビーホルダー」の所領に似た村落であつた。以上三形態のうち、まず、地代免除・不課税地について更に詳しく検討してみよう。

單獨所有村落エカボーガムについてはB R中ほとんど記述がないが、ティプー・スルタンの支配期にはすでにほとんど存在しなかつたようである。これに對して複数所有村落アグラハラムについてはB R中に多くの記述がみられる。そこで、次に二つの史料をあげて、アグラハラムの所有様式・形態を考察してみる。

〔三〕ウィリアム・マクラウドの書簡―アグラハールについて^③

過去數世紀の間、國家より免租地として永代施與されたアグラハールは、施與當初の家族數に應じて分割地として割りふられたと考えられる。それは二、三から一〇〇區劃に分割された。

これらの分割地はやがて各（バラモン）家族から派生した分家數に應じて、更に、二分されたり、細分された。他方、數世代を経るうちに、世襲的權利及び購買によつて、數分割地が單獨のバラモン財産となつたであらうことも考えられる。

五乃至十年毎にバラモンは彼らの分割地の割り替えを行なつた。それは、きわめて公平な方法でなされた爲、わづかたりとも不滿の餘地はなかつた。かくして、アグラハールは村勘定方と（バラモンの）全員一致で選ばれたもつとも思慮あるバラモン達（原文では farmers）によつて公平に分割された。その結果各分割地は各等^④級の土地が同じ割合で配分されたのであつた。このようにして、各分割地から成る所有區劃について登記がなされ、各分割地には番號と（所有者の）名前が付された。

（土地割替＝再分割の方法としては）二枚の券が作成され、一方には、分割地の番號が、他方には所有者の名前が記入されており、「くじ引き」の要領でひかれた。^⑤

同じ様式で、バラモン達は現在もなお分割―より正しくいえば、一定期毎にその分割地の交換―を續けている。というのは、様々な自然條件で肥沃な地質も變わるからである。（以下略）

〔四〕ウィリアム・マクラウドの書簡^⑥

南部地區のアグラハールは、その地が獨立小領主に服屬して以來サルバマーニヤム即ち、永代免租地としてバラ

モンに享受されてきた。それらはマイソールのヒンドゥー及びハイダルの支配の間にも免租地^{フリーランド}であつた。(中略)

アグラハーラムは各々四乃至一〇〇の分割地に分けられる。その分割地は賣買・世襲が可能であるので、一家族が十の分割地を所有するものも、多くて一分割地の四分の一しか所有しないものもある。

先にあげた史料〔一〕〔二〕及び右の〔三〕〔四〕より次の諸事實が確認される。即ち、(1)バラモンの、分割地に對する世襲・賣買・譲渡の權利 (2)分割地數の格差 (3)分割地の定期的割替である。ではこれらの事實からバラモンの所有權に關してどのようなことが考えられるであらうか。

數世代の過程でバラモンの所有分割地數に格差が生じるのは、第一に分家族の派生による土地の細分化の結果である。この場合、派生家族の多少によつて當然分割地數に格差が生じるが、新たに他の分割地が施與されない限り、同一家系のバラモンが本來所有する土地の絕對地積は不變である。第二に問題はバラモン家族が賣買・譲渡によつて、分割地數及び地積を増加した結果格差が生じる場合である。この場合、もし、分割地に對してバラモンが一般に絕對的所有權もしくは強固な所有權を有しているとすれば、當然肥沃地の確保・地積の増大・既得權益の維持を圖つたであらう。しかし、史料〔三〕にみられるようにイギリス支配期に至る迄「定期的に均質・均等な土地の再分割」割替が「村落成員の代表」によつて「各バラモン家族の間」に行なわれてきた。この事實から、(1)村落内の分割地に對する、バラモンの個別權益所有權が必ずしも絕對的なものではなく、(2)村落のバラモン集團による、いわば共同體的な規制が常に個別權益に加えられること、換言すれば、バラモン共同體の紐帶を維持すべく賣買・譲渡等による土地の權益移動・權益の一部集中化に偏在化を阻止しようとしたのではないかと考えられる。その場合、バラモンの村落集會「サバー」(サバイ)がバラモンの權益調整に大きな役割を果たしてきたと思われる。

最後に貢租義務村落シュロットウリヤムについて課税對象、課税率等をBR中の若干の村落史料から考察してみたい。

〔五〕 マイソール領ネーラパッハリ村の記録^④

この村は一七三五年、マイソール藩主クリシュナ・ラージャウダイヤールによつて十七人のバラモンにシュロットウリヤムとして施與された。彼らバラモンは次のような地代を貢納せねばならなかつた。

一 アサリ村落ネーラパッハリ及び一ダーキリ村落クンバラパーディ……六〇ナグ

一 アサリ村落ナガルークダル及び二ダーキリ村落ベヴィナマラダハリ、コーヴェーハリ……一六ナグ

ベンカッタサムドラムの貯水池……三〇ナグ

バグタナカライの貯水池……一三・五〇ナグ

サーヤル等々……八・三〇ナグ

アサリ及びダーキリ村落という語から支配者によつて「施與もしくは所有の確認された」村落（分割地）に對する地代であらう。また二つの特定地に存在する貯水池に對して課税していることからバラモンの享受していた水利用益に課税されている。のみならず、關稅、市場稅等村落經濟にかかわる諸稅が賦課されていた。これら地代、水利用益稅、雜稅は、シュロットウリヤムの施與條件として稅率、稅の種類が規定されていた。それらは次のような内容であつた。(1) 各年現金で納める定額免役地代 (2) 毎年、現金で地代の一部（四分の一乃至八分の一）を貢納 (3) 各年地代の一定額を（國家から）賦與 (4) 各年地代の一部（四分の一乃至八分の一）を〔國家から〕現金で賦與 (5) 收穫の若干量を〔國家から〕現物で賦與 (〔は筆者注〕)。これらの稅率はしばしばシュードラ村落に對する課稅の一〇〜三〇%^⑤、時には、評價地代額の四分の一以下の場合もあつた。そして、各シュロットウリヤムに對する課稅率の差は、施與地内の耕作者の數によつて規定されたのである。^⑥

これ迄、バラモンの、土地に對する權益をその内容、施與條件、所有形態の側面から明らかにしてきた。バラモンへの施與地は以上からも明らかのように、全てが永代免租という特權を與えられたのではなく、すでに施與條件として明確に貢租義務を負うものもあった。しかし、その場合でも課税は軽く、一般にバラモンの特權的權益を甚しく侵すものではなかった。

三 イスラム治下の土地權益

十八世紀中葉、マイソール藩王の衰退とそれに代わるハイダル・アリ、ティプー・スルタンのイスラム支配は、バーラマール地方のバラモン達にとつて新たな脅威となつた。從來諸王朝の變遷の中で享受してきた永代免租地は、とりわけティプーの命によつて、特權的權益を剝奪されていくのであつた。そこで本章ではバラモンの土地權益が、ティプー・スルタンの支配期にどのような制約をうけたか、また、それはティプーの土地政策とどう關連するのかを明らかにしてみた。そのために次に、南部地區サンカリドゥルグの二十二のアグラハールに關する報告をとりあげ、これらの權益内容を検討してみたい。

〔一〕 中部地區サンカリドゥルグにおけるアグラハール及ビシュロッティリヤムに關する報告^④
これらに含まれる地區は次の二十二地區である。

- | | | | |
|-----------------|-----------------|----------------------|-------------------|
| 1 Kaverippatti | 2 Koneripatti | 3 Pillagavundampatti | 4 Virachhipalayam |
| 5 Pudukpalayam | 6 Samayasangiri | 7 Kaliyānūr | 8 Ballakuri |
| 9 Karungalpatti | 10 Mammūḍi | 11 Mōḍamangalam | 12 Komārāpalayam |
| 13 Pallipalayam | 14 Kuttampūḍi | 15 Aiyampalayam | 16 Lātivādi |

17 Kesarapati

18 Velanattam

19 Kattari

20 Vaikuntham

21 Taliyūr

22 Odappalli

(1)これらの村落のうち、最初の九カ村に關する狀況はほぼ同じである。これらは、マイソール政府以前にはポリガールによつて施與され、ティプーの時代に彼の父（ハイダル・アリー）の死後まもなく國家に接收される迄バラモンの所有であつた。

それらのうち、いくらかは政府^{ザルガム}の役人により、他はバラモン自身によつて、一七八六年迄請負われた。その年、ティプーは新しい詔勅を發布し、各村落の一部即ち、各マウザの數ブッティ^③をもとのバラモンの所有にもどした。このため、これらの村落は詔勅に明記していないが、アルダマーニヤムとよばれている。

(2)一七八六〜八七年、イナームダールは、彼らに割り當てられたイナームを所有するやうにとの命を受け、その所領にもどつた。しかし、多數のブッティの領域は、マウザと確認されなかつたので、カルナムやパテール達は縣の政廳（カッチェリー）^④より境界を定め、イナーム地から國有地を分離するやう命じられた。

(3)同年、アーミルダールのニザーム・サーヒブはその區分がバラモンにきわめて有利であることを知り、自ら諸村へおもむき、その報告が事實であると判明したので領域超過分もしくは詔勅に明記されたイナーム地以外の土地に對する地代分だけ、免役地代を課した。

(4)以後、ティプーの統治の間には、この免役地代以外にいかなる税も付加されることはなかつた。その地が會社（政府）に割讓された時、免役地代については隠されており、一七九四年初め迄、税は全く支拂われなかつた。この年その事實が判明したので、未納地代が徴收された。……

(5)アグラハールラムには、もとの詔勅を有しているものもあるが、それらのすべては、サマヤサンギリを除いて、ティプーの交付したものである。マウザが數ブッティを有しているところでは、三〜四ブッティのみが、その所有者名

をあげて、イナームとして施與されとのみ明記されている。しかし、マウザが一ヶ村のみである場合には、その半分を非イナーム地として分離し、その地をアルダマーニヤムとした。それ故、恐らくティプーの意圖は（イナーム地を）半分に分割し、詔勅の後にターキード（Turk）^④を發布して、アーミルダールに免役地代を賦課せしめたと考えられる。私（トーマス・マンロー）はこの意見を次の事實によつて確信する。即ち、カーヴェエリーバッティのアグラハラームでは、詔勅に記入されているウッタラムバーライヤムのプッティは全くバラモンには與えられていなかった。それは明らかに、その領域が廣すぎたからである。アグラハラームの土地の中では、國領地（sarkar lands）は地積は少なく、地質は悪い。もし地租の取り分が實際の生産高に應じてなされれば、バラモンは現在の免役地代の二・三倍を支拂わねばならないであらう。

第十番の村落…… (1) このアグラハラームは先の第一・第九番目のアグラハラームと同時期に一部が接收され、イナームを手離したものである。その地に對しては前述の理由で免役地代が課せられた。その中で、灌漑地の地租分はティプー政府によつては課せられなかつたようであるが、それは特免によるものか、イナーム地の返還と（第三次マインソール）戦争との間が短かすぎてその間に灌漑地にまで課税するゆとりがなかつたためであらう。

(2) 灌漑地はアグラハラームの中のどの區域よりもはるかに重要であり、しかも灌漑地では、以前には國の取り分とイナームの取り分とに分割されておらず、且つバラモンはこれ迄、兩者の取り分がなされているところでは、請負いに出すことによつて、アグラハラームでの取り分以上の大きな利をえてきた。

第十一・第十四番の村落…… (1) これらは、いわゆるクラヤアグラハラームである。^⑤これらは、商人により、あるいはバラモンによつて、ハイダルに幽閉される數年前のマイソールのラージャーから購入されたものである。そのような賣買の場合、各土地に對して支拂われるべき購入額は、慣例に従い、その地代一年分の十倍であつた。

(2) しかし、ハイダルが權力をとつた時、彼は未納地代が完納されるまで、或いは又、各バゴダ毎に十バゴダの購入

税を領收するまで、それらの村落を接收した。

(3) ティブーは、クラヤアグラハラムを他のすべてのイナムと同様に接收してしまった。しかし、一七八五、八六年、彼は前述したアグラハラムと同様の方法で詔勅によってこれらの接收地をイナムダールに返した。それらは、アルダマーニヤムとみなされる。

(4) 國有地とイナム地との分割は、パテルとカルナムとによってなされた。しかし、アーミルダールのニザーム・サーヒブは調査の結果、イナムダールが多く所有しているという理由で免役地代を課した。

(5) 現在バラモンに残されている土地は、國有地よりも地積は少ないが、より生産性が高い。三分の二がバラモンの所領にもどった現在でもなお、地代は元の詔勅に記載された地代よりも高いのである。

(6) クラヤアグラハラムはダーナム程、長期の所有權とは考えられていない。それらは商人であれ、バラモンであれ、どんな購入者にも賣却され、且つ、イナムダールが村落の最初の査定額以上の地代を領受して、購入時の全費用を償却してしまうと、しばしば（國家によって）接收される。

第十五番の村落……これはサルバマーニヤムアグラハラムである^⑤。それはティブーにより接收され、再び一七八六年に完全にバラモンに返された。

第十五と第二十二番の村落……(1)これらは、ティブーによって接收されたアグラハラムである。それらの中の二つは、依然として、バラモンのみ及びバラモンとリヨット共同で請負われ、他のすべては全くリヨットが請負っている。

(2) このことからわかるのは、接收後、少なくとも數年以内は、前占有者にその地の地代請負を委ねる事は通例ではなかったことである。何故ならこれら七ヶ村の内四ヶ村は、（バラモンが）放棄せざるをえなかったからである。數村では沒收地が生じ、直ちに地代は引上げられたので、彼等はその地を放棄した。

第十六番の村落……この村落の中で灌漑地の最大部分は接収されて以來ずっとバラモンの手中にあり、定額地代ではなく、その査定額よりずっと低額の地代であった。それらは現在若干引上げられ一般農民（リヨット）の支拂う地代標準額の二分の一である。

第十七番の村落……この地は接収以後ずっとバラモンの経営下にあった。しかし、非イナム地に對するバラモンの地代額の約三分の二を支拂っていたので、彼等の幾人かは逃亡してしまつた。ここ數年間は、以前の地代額である。

第十八番の村落……この村落の状況は第十七番と同様である。ただリヨットがその一部を請負っている。

第十九、二十番の村落……これらは數年間、リヨットの手中にあった。

以上二十二のアグラハールムの内第十五、十七、二十番だけが本來一個人の所有地（エカボーガム）であつた。残り全部は「分割地」に分割されて、數家族に與えられた。

イギリス支配前の二十二のアグラハールムの様態をあげたのであるが、これらの報告からどのようなことが考えられるであろうか。まずバラモンの土地に對する權益がティプー期にそのまま認められたのではなく、彼の交付する詔勅によつて、初めてバラモンの權益が「安堵」されたのである（第一番、九番の(1)、(5)、第十一番、十四番の(3)）。このことは、他のアグラハールムについても一般的にいえる事である。そこで更に、マームンディ村のバラモン達による「會社政府への請願狀」及びそれに添付された「ティプーの詔勅」からうかがつてみよう。

〔二〕サンカギリ縣の村カトゥパーライヤム、カラットトゥパーライヤム、ナッラーカブندانパーライヤム、ヴィライナムパーライヤムを所有するマームンディのバラモンより會社政府への請願狀

五村の住民等が恐れ乍らも請願するものであります。

マドゥーラのティルマラーナーヤツカルの統治期或いはそれよりはるか昔より上記五村を貴下の請願者であります私達に、一一三・五スワースティヤムに分割して施與されました。貴下の請願者は、當時より、一七八三年までこれらの村を享受してきたのであります。ティプーが繼承してより、我がアグラハーラムは沒收されたので、私達はその窮狀を訴うべくセーリンガバタムに参内し、その結果、ティプーは三村マームンディ、カットウパーライヤム、カラットウパーライヤムと、五村に含まれる灌漑地(ナンジャイ)に對して勅許を下付されました。それ以後は、ティプーの詔勅によつて一七九二年までそれらの權益を享受しました。(後略)

〔三〕 ティプー・スルタンの詔勅^④

セーリンガバタムの政府に従うすべてのアーミルダール、デシュムク及び現在及び未來のサンカギリ郡タムルナダに告ぐ。

マームンディのバラモン達に、イナームとして三村と、その村に屬する貯水池、水路及び各年の地代五九五ゴバリチャクラム九フアナム、九・五アンナをここに與える。故に汝らはバラモンに對して、彼等のイナームを所有せしめよ。彼等は國家の繁榮を祈らん。

(今後は) 毎年新規の詔勅を必要としない。上述の趣旨に従いて行なえ。

上記イナームの分割區數は一一三・五である。……………

このような詔勅は、エダッパディ縣^⑤やセーラム縣^⑥、サンカリドゥルグ縣^⑦のアグラハーラムに多く見られ、その内容はいづれも、ティプー支配前のバラモン權益が、數世代にわたり慣例的にもしくは各王朝の勅許によつて得ていたものであつてもティプーの勅許によつてあらためて確認されるものであることを示している。即ち、バラモンの土地に對する權益それ自體は上位權力から獨立して不變的に維持しうるものではなく、常に上位權力者の保護もしくは容認によつてはじめて維持されるものであつた。^⑧

このようにバラモンの權益が、常に時の支配者から、何らかの形で「安堵」Ⅱ「所領の確認」を得て維持されねばなら

なかったということは、同時にまた、彼らの權益が支配者の政策によつて何らかの制約もしくは變容を加えられたであらうことを示唆するものである。^⑧では、ムスリム支配期、バラモンの既得權益はどのような制約を受けたのであろうか。

先に述べたティプーの諸詔勅を検討してみる時、それらのいずれにおいてもバラモン所領地が再分割され、その結果、

「分與地」數もしくは「土地所有」條件がティプー以前とかわつてることが分かる。ウィリアム・マクラウドは「セーラムでは、既に、エカボーガムは國家に接收され、以來それらの村落は地代を支拂つた」と指摘し、續いて「ティプーの請負制度のもとでは、アグラハールラム村落と同様の規定で評價額の三分の一の地代が課税されていた。」と述べている。^⑨又彼は南部地區のアグラハールラムに關するリード宛の報告の中で、ヒンドゥ諸王朝及びハイダル・アリ支配期までサルバマニヤム即ち永代不課税であつた村落がティプーによつてクローディの年（一七八四―八五）に他の村落と同様に課税されたと述べている。^⑩又、セーラム及びアナタガリの十二のアグラハールラムのバラモン、ラグパルリ・シュリニバトサー・アイヤンガー等三十六人の請願狀によると、「……私達は Gattu 及びムスリムの諸王朝三〇〇年にわたつて自由施與地即ちサルバマニヤムとして上記のアグラハールラムを享受してきましたが……ティプー・スルタンの治世になつて、初めて村の收入に應じて毎年現金を支拂うよう要求されたので、支拂うことにし、以後八年續きました。……」とのべており、從來不課税地であつたものが課税されたことを示している。また、ナーマツカル及びバラマティ縣の四つのアグラハールムはティプーから詔勅を得て、マニヤムとして各々もとのアグラハールラムの半分の地をあらためて施與された。^⑪ティプーのアーミルダール長官の居地であつたサンカリドゥルグでは、全ての土地は等積の二つの地域に分割され、一つは國領地 (Sakar land) 他はマニヤム (自由保有) とよばれた。^⑫また、バラモンが購入したクラヤアグラハールラムに對しては、他のアグラハールラムに比してはるかに重い税が課せられた（「一」第十一番、第十四番）。このように税を課する場合、ティプーは、まず、それらの地が後繼者斷絶、バラモンの犯罪による罰等の理由による沒收、^⑬バラモン所領が廣大・富沃であるという理由による接收（「一」第一番、第九番）^⑭それが購買所領であるという理由による接收（「一」第十一番、第十四番）を

行ない、一旦國領地化してそれを請負い制にするか或いはバラモンの權益を認めつつ、その地に直接免役地代を課したのであった。以上の權益の變化を要約してみると次のようになる。(a)從來のアグラハーラムが、あらたにティプーの詔勅によって「安堵」されたもの。この村落には、サルバマーニヤムとよばれる永代不課税村落と、一定の免役地代を國家に納めるジヨディガーイ村落とがあった。一般にその免役地代額は總査定額の三分の一に相當するものであった。更にジヨディガーイ村落は、後になると、國家の直轄經營地となり、バラモンはその地代のうち、三分の一を受領する「分益村落」(Share Village)の形態が形成されてきたのである。このことは、ティプー期以後、バラモンの中には、絶對的な所有權を失ない、單に地代徴收(請負)人化していることを示している。(b)ティプーによって接收され、後その一部がバラモンに返された所有權。この村落はアルダマーニヤムとよばれる。即ち、本來のバラモン所領のうち、ティプーの詔勅によって半分を不課税地とし、あと半分の地は政府の直轄か請負いのいずれかの方法によってシュードラ村落と同率の地代が課せられていた。この場合、國家に接收されたアグラハーラムはシュロットウリヤムのように慣例的に固定された地代額(率)を支拂うのではなく、毎年中央政府から納税請求書(Pattar Pattin)を受け、それにもとづいて納税せねばならなかった。更にまた、(c)ティプーによって名目的に接收され、政府役人の默認によって、低額地代で享受された所有權(「第十六番」)があった。

(a)(b)の場合、本來のバラモン私領地が政府の直轄經營地か請負地に轉化されるのであるが、直轄經營地の場合、政府の地方官たるターシルダール、サリスタダール、アーミルダール、パーテル、カルナム等がその管理にあたるのであった。しかし、アーミルダールはしばしばムスリムであり、ヒンドゥー村落の状況にうかつたので、村落の貢納をそのまま領受するかワイロによって、實質的にはバラモンの權益をそのまま容認することになった。また、政府によって任命されたカルナムもバラモンによって買収されるか村落の一劃を與えられ、その所領とひきかえにバラモンの權益を認めることがあった。また請負いの場合も、政府の地方官が徴税請負人の場合、しばしば右の理由によって、バラモンの權益を容認することが多かった。しかも、もとのアグラハーラムの査定はバラモン自身によってなされたので、當然彼らに有利になる

よう工作された。^②たとえ請負人が、バラモン以外の「リヨット」と總稱されているシュードラ層であっても、バラモンは社會的、宗教的な影響力を行使して、シュードラ農民に指示を與えて服従させることがあった。^③

請負地であれ、直轄地であれ、一旦國領地化されたバラモン所有地は、たしかにバラモンの私領權は否定されるのであるが、しかしそれは土地所有の一側面であつて、他面、バラモンは依然として、彼らの權益を維持しえたことを示している。従つて、バラモンの權益喪失の結果、ただちに國領地が増大したり或いは、請負制の強化によるターシルダール、アーミルダール層の領主化が生じたとはいえない。それはティプーの土地政策の過程で、多くの場合、接收地即國領地のバラモンへの返還という事態がおこっているからである。何故そのような事態が生じるのか。考へうることはバラモンが從來の特權的權益を收奪され、土地所有者でなく請負人に轉落し、或いは地代を課された結果、バラモン下にある農民層（恐らく農業勞働者カースト）及びシュードラ農民層を率いて、耕作の放棄等によつて、農業生産を低下させ徴税に阻帶が生じた爲であらう。このことは次の理由による。ムスリム支配期及びイギリス支配初期においても、バラモンの、地方社會における影響力は無視しえなかつた。從來、ヒンドゥー諸王朝の支配が維持、安定される爲には、村落集團の統合・秩序化が必然的に要請された。^④しかし、その場合、中央の支配權力が必ずしも直接的に村落段階に迄及びえないことは、インド社會に特徴的にみられることであつた。（我々がそのような村落〔集團〕の特徴を「アジア的共同體」の普遍的特性即閉鎖性・孤立性とみることに疑問があるが）従つて、上位權力者がその地方社會を支配下におく爲には、中央の差遣官による統治のみでなく、その地方社會の傳統的統合者と相互依存の形で關係を保つことにより、いわば、間接的に地方社會を統治することが不可欠であつたのである。まさに、バラモン（集團）がその地方社會秩序の要としての役割を果したのである。^⑤ムスリム支配になつて、彼らに對する土地收奪という直接的な壓力の強化は、むしろかえつて、中央支配の弱體化を招くことになつたのである。すなわち、稅收の増大を期待した國領化政策は、バラモンの反撥によつて村民の逃亡、耕地の荒廢をひき起した。その結果として、再び、バラモンの權益を——一部は依然として國領地として確保しつつも——復活させ、秩

序の維持を圖らねばならなかった。しかしそのような政策も會社政府の南インド進出、領土の擴大の結果生じた三次（四次）にわたるアングロ・マイソール戦争によって急速に混亂していくのであった。

ところで、これ迄ティプー治下のバラモン權益の變容を明らかにしてきたのであるが、ここで更に、ティプーのバラモン權益に對する政策の他の側面についてのべてみたい。

ティプー・スルタンは、イギリスとの數次にわたる戦争の爲、多額の戦費を要した。戦費の調達は、必然的に高率の地代賦課、私的土地所有の制限という方策によってなされた。事實、南インドにおいては、ティプーの支配期、過重な稅收奪の例が多く報告されている。^⑧

バラモン私領地の國領地化、及び請負制、直轄經營、或いは免役地代の課稅による稅の増收は、またティプーの土地政策の一環であった。それは、結果として、右に述べた如く全面的にバラモンの私權を消滅させ、國領化することは出来なかつたが、詔勅の更新とそれにとまなう所領の査定という作業によって、從來のバラモン所領を確認し、同時にバラモン私領地から國領地を分離し、從來の私領權に對し、國領權の確定を圖つたのであった。更に、そのみならず、BRに斷片的に記述されている内容から判斷すれば、アーミルダール、カルナム等中央政府の地方官は、バラモンに對する既得權益の容認、保護によって、バラモン領の一部を贈與され、地主化する萌芽が見出されるのであった。^⑨また、ムスリムに對する論功行賞として、從來のイナーム地を與えたり、國領地及びイナーム地の一部をムスリム寺院への施與とすることがあった。^⑩このことは、ムスリム支配期に、バラモン私領地の接收→國領地化の目的が單に稅收の増大のみを意圖したのではなく、ムスリム臣下への封與地の擴大と彼らの經濟的基盤の安定化をも目的としたものであらう。

小結と今後の課題

以上本稿ではイギリス支配前のバラモンの土地權益とその變化について明らかにした。これ迄の論點を要約すれば、(1)

バラモンの土地權益は必ずしも一樣に「免租權」を享有していたのではなく、「課税地」との二種の施與地があった。(2)バラモンの土地權益は上位權力者(國家、王朝、地方領主)の保護を常にうけていたとは限らず、時の支配者の「權益確認」||所領「安堵」によつてはじめて、享受された。(3)ティプー||スルタンの支配期には、バラモン私領地の多くは國領化され、請負いに出されるものもあつた。また免租權に制約が加えられ、地代、免役地代の賦課が強制された。(4)この結果、バラモン層は從來の特權を享受しえず、地租請負人化への萌芽がみられた。(5)もつともバラモン權益への制約が、バラモン層の上位權力者への全的な從屬を導いたとはいひ難い。彼らは權益の縮小をうけつつも、新たな形で上位權力者と依存關係を結びつつ(例えば徵稅請負人や、少なくとも村、郡段階での役人に轉身することによつて)彼らの權益維持を圖つたと考えられる。

ところで、本稿と關連して南インドの社會構造を理解するに重要な課題が残されている。その一つは、イスラム支配及びそれ以前に地方王朝が崩壞していく過程で、バラモンと地方領主層との間にどのような權力關係が形成されたかという問題である。すでに指摘されているように、ヴィジャヤナガル王朝の崩壞の過程で、ナーヤカ、ポリガール等の地方領主層(土豪層)が擡頭し、それ迄王朝權力と結合して地方の統合に樞要な役割を果してきたバラモンの勢力は衰退化しつつあつたと考えられる。果してそのような結果、バラモンと地方領主層とは地方支配をめぐつて對立關係にあつたのか、それとも新たな相互依存關係を形成してきたのであろうか。次に、バラモンにかわつて地方領主層が擡頭してくる背景には、當然、經濟的或いは身分||階層的變動があつたと考えられる。假にそのような變動があつたとすれば、いわゆる「村落共同體」内の階層關係、土地保有・所有關係、秩序體系にも新たな變化が生じたであらうと考えられる。いづれにしても、これらは推定の域を出ない。しかし、右の課題に關して、すでにマラータ史研究などでは、明確な課題提起と鋭利な分析がなされつつある^⑤。今後、南インドの地方支配構造を明らかにする作業を通じて、右の課題を追求していきたい。

British India, 2nd. ed., Calcutta, 1968, タミル語は *A Dictionary Tamil and English, Tranquebar*, 1910 に於く。

- ⑭ プラマデーヤ及びアグラハラ(ム)の文獻における用法・用例については、すでに左に觸れられているので参照されたい。山崎利男「四—十二世紀北インドの村落・土地の施與」(松井透・山崎利男編『インド史における土地制度と權力構造』東京大學出版會、一九六九)

⑮ B. R. No. IV (2)

- ⑯ nidhi, 「財寶」もしくは「發掘された財寶の譲渡の行爲」の意。

⑰ nikshēpa, 「擔保」の意。

- ⑱ taru, 「木」又は「土地の賣却・譲渡の場合、その土地になる果菜の譲渡」をいう。

⑲ pashana, 「譲渡・賣却地に存する貴石、礦物等の權利の譲渡」の意。

⑳ akshiniāgami, 「將來の特權」の意。

㉑ sadhya, 「將來達せられる目的、事柄」の意。

㉒ B. R. No. IV (3)

- ㉓ Dharma Kumar, *ibid.* pp. 41—43, 58—59, 及び辛島昇「村落共同体に關するチョーラ朝刻文」(松井透編『インド土地制度史研究』東京大學出版會、一九七二)には、これらカーストの農業耕作が示唆されている。

㉔ Dharma Kumar, *ibid.*, p. 30

㉕ B. R. No. XXIII

- ㉖ agharam 「最初に受けとるもの」の意。「バラモン居住地域」の意にも多く使われる。

㉗ shrotriya 「ヴェーダに精通しているバラモンに對して、特權的な條件で與えられた村落・土地」。後には恩賞としてヒンドゥーヤムスリムの官吏・軍人に與えられた一種のイナーム。

㉘ 一般に「國家から施與された村落の中で、耕作者から徴收される地代のうち、國家の取り分」(SDG. vol.1, Part2, p. 52)

㉙ B. R. No. XXIV

㉚ B. R. No. XVI

㉛ 「第五報告書」によれば「村落の土地登記によつて、財産權が確認される」とのべられている。[FR. p. 337 及び柳澤悠「十八世紀末南インドにおける土地保有關係—『イギリス下院インド特別委員會第五報告』にみる—」(松井編前掲書)]

㉜ ウィリアム・マクラウドの報告とほぼ同内容の事實がFR中(FR. pp. 336—7)にみられる。(前掲柳澤論文参照)なお、FRによると、分割地を意味する pung, banghum が四つで car ay を成し、各村落は數 pung から成つてゐた。また個人の分割地は數 caray から成つてゐた。(FR. p. 337)

㉝ B. R. No. XXII

㉞ B. R. No. LVIII

㉟ asali イスラム制度の下では登記された村落に適用される語で「本來の」という意。

㊱ dakhili ㊱ asali に對して「後の」という意である。恐らく、支配前に既得權を認められていた所領と、支配後に施與した村

落の意であらう。

② *satya, sair*, 地租以外の關稅、通行稅、家屋稅、市場稅等の附加稅。

③ BR. No. XXIII

④ BR. Nos. XVIII, XXII

⑤ BR. Nos. XXIV, XXXVI

⑥ BR. No. XXXVI

⑦ Letter from Captain Thomas Munro to Major Alexander Read, 20—6—1796. (BR. No. XXXVI)

⑧ *mauza*, 「徵稅記錄に各々名前がいつてなり、且つ區劃の明確な一區劃もしくは複數區劃の土地」

⑨ *putti*, 「(1)容量單位。candyと同じ。一四九四一・六五三立方インチ。北シルカールでは、三六三・五・四一三立方インチ。

(2) 地積單位の場合、約ハエーカー。」

⑩ *ardha-maniyam*, 「土地の一部もしくは半分が不課稅であり、他の半分は通常の課稅率の五割で課稅される村落」

⑪ ハイダル・アブリはマインール領に二十九の *cutcherry* を置き、軍事・民政を處理した。これらの *cutcherry* の職務分掌は次のようなものであつた。(1) *Assaf Dewan Cutcheries*—徵稅業務 (2) *Tosha khana*—國庫擔當 (3) *Askar cutcherries*—常用馬の徵集・經費擔當 (4) *Sowar Cutcheries*—雇傭馬の經費擔當 (5) *Jaish cutcherries*—正規步兵隊の經費擔當

(6) *Ahmed, Assudulla*—不明 (7) *Suddoor*—民兵の經費 (8) *Cometty cutcherry Suddaret*—イナム地經營と管理 (9)

Askadar—情報部 (10) *Amrutamahul*—穀物・食糧部 (11)

Mullik (Tujar Cotty)—通商部 (12) (B. R. section 1, p. 151)

⑫ *amilidar*, 縣段階の政府徵稅官。又、地代請負人ともなつた。今、この簡單なティンブスルタンの行政制度と云れど、

7 州 (tookry) —164 縣 (1796 年には 9 州, 1791 年には 18 州)

州 段 階

{ *assoph* (民政官) 2 人 } — *Seristadar* 6 人 < 副官 6 人
{ 軍政官 2 ~ 4 人 } < 書記

縣 段 階

{ *Amildar* 1 人 *Sherishadar* 2 人, *Kutimunny* }
{ *Shanbhogue* 1 人 }

(BR. Sect. 1, pp. 151—2)

⑬ *takid*, 「布巾」

⑭ *kraya agraharam*, 「購入 (*Kraya*) による所領地」タミル語では *kirayam*.

⑮ *danam, dana*, 「施與」

⑯ *sarva maniyam*, 「不課稅施與地」

⑰ BR. No. LIII—2

⑱ *swa stiyam*, 「ベリヤンの所有する世襲地 (ミラシ) 又は特權」

⑲ BR. No. LIII

⑳ *chakram* = $\frac{1}{16}$ pagoda, *falam, fanam*, $12\frac{3}{4}$ fanam = 1

rupee, lana, anna = $\frac{1}{16}$ rupee

⁵⁶ BR. No. LIII-No.1

⁵⁷ BR. No. LIII

⁵⁸ BR. No. LX

⁵⁹ 古代北インドにおいても同様の傾向がみられた。(山崎利男
前掲論文参照)

⁶⁰ マンローの南部地区の土地制度に關する報告によると、ハイダル、ティプーの支配前にも本来のアグラハーラムが廢絶されたり、國領地に接收されたという例が多くみられる。今それらのうち若干の例をあげ、更に、その理由を考察してみたい。

(1) ポリガール、ボムマ・ナーヤクによつて、サルバマニヤムとして施與されたインドウールの村落は、後、ジャガデーバ・ラーヤによつて接收され、十六のスワステイヤムに分割され、そのうち四つはヴィーナ奏者に、残りは十二人のバラモンに施與されたのであった。(BR. No. LVIII-4)

(2) マーングルチはサリバーハナ二二四六年にマイソール藩王ブラバダーデヴァラーヤによつて八人のバラモンにサルバマニヤムを、また、スワステイヤムとして、八人のバラモンに各三區計二十四區を施與した。しかし、一七〇二年、マイソール藩王クリシュナ・ラージャ・ウダイヤールによつてこれらの所領を接收し、以後(王の)没する迄國領地とした。(BR. No. LVIII)

(3) マイソールの藩王によつてサルバマニヤムとして認められて

いた私領地が藩王の母の要請によつてシュロットウリヤムに轉化されたり、サンカリドウルグ近郊のアグラハーラムが接收され、その地の防衛の爲に密林地帯にかえられた、という内容がみられる。(BR. No. LVIII-5)

ではヒンドウー王朝下でバラモンの權益に制約が加えられた理由は何であらうか。この點については詳細な報告はみられないのであるが、先にあげた(2)(3)の例からカースト上、もしくは政治・軍事的要因が考えられる。即ち、(2)の場合、クリシュナ・ラージャ・ウダイヤールの死後、攝政となつた祖母に對して、バラモン達がイナーム地の返還を要請した。しかし、彼らは、すべてシュリークリシュナ(バラモン)セクトに屬してゐた。バラモン集團は三つのセクトより構成さるべきであり、更にもう二つのセクトが彼らの集團に加えられなければ接收地は返せないという理由で拒否された。そこで、スワステイヤムの數を二十四より三十に増やし、その六つの區域にソーナールセクトのバラモン四人、ヴィシヌヌセクトより一人、シュリークリシュナセクトより二人を割りあてて、彼らのバラモン集團の成員として認めた。その結果、直ちにアグラハーラムは返され、以後、一七七五年迄もとの權益を享受したという。この例によると、宗教的理由もあらうが恐らく、有力バラモンセクト間の勢力均衡を保つことにより、支配體制の安定化を圖つたのではないかと考えられる。それ故、特定セクトによる土地所有の集中を排除して、數村落集團もしくは一村藩内のバラモン勢力のバランスを保持しようとした政策の一つであつたと思わ

れる。(3)の例によれば、少なくとも、サンカリドウルグなど政治的軍事的要衝の地は、他の支配勢力の侵入を防ぐために、周縁部の接収がなされたことは考えうる。

- ① BR. No. XXIV
- ② BR. No. XXII
- ③ BR. No. XXV
- ④ BR. No. XXVI
- ⑤ BR. No. XXVI
- ⑥ BR. No. XXIV
- ⑦ BR. No. XXII
- ⑧ BR. No. XXII
- ⑨ BR. Nos. XXIX, XXX, XXXV.
- ⑩ N. Mukherjee, *ibid.*, pp. 4—5
- ⑪ BR. No. XXXVI—Omalūr の條
- ⑫ BR. No. XXII
- ⑬ BR. No. XVIII
- ⑭ BR. Nos. XXVII, XXXIV

- ⑮ BR. Nos. XXVI, XXXIV
- ⑯ cf. R. E. Frykenberg, *Guntur District 1788—1848*, Oxford, 1965, *do.*, *Elite Groups in a South Indian District 1788—1858*. (Journal of Asian Studies, vol. XXIV, 1964—65)
- ⑰ N. Karashima, *The Power Structure in the Cola Rule*.
- ⑱ Dharma Kumar, *ibid.*, p. 77
- ⑲ この點については、断片的な記事がみられる (BR. Nos. XX, XVI) のみで、更に、具体的に、政府役人の地主化過程及び、在來の地方土豪層 (ポリガール)、ジャーギールダー層との地權關係等が檢證される必要がある。
- ⑳ BR. Nos. LXX, LXXIII
- ㉑ 辛島 昇「ヴィジャヤナガルの政治と社會」参照
- ㉒ 深澤 宏「インド社會經濟史研究」東洋經濟新報社 一九七二及び小谷荘之「インド村落共同體の再檢討——一八世紀デカン地方の村落共同體における分業關係——」『歴史學研究』三六四、一九七〇